
木の葉の下で

宮古はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木の葉の下で

【Nコード】

N1074BA

【作者名】

宮古はるか

【あらすじ】

一人の女子高生が青春の合間に訪れるあれやこれやに悩み、様々な感情を行動へと移していくお話。

風の話（前書き）

原文は2008年ごろ書いたものです。それらしい単語や表記も少し登場するかも知れませんが。どうぞお楽しみくださいませ。

風の話

その日、私は疲れていた。今がいつなのかも、自分がどこにいるかも、自分がだれなのかさえ、忘れてしまいたかった。何が原因だったか、思い返してもよくわからない。ハッキリとは覚えていなかった。

自分を取り戻したのは、不思議な老人との長い会話を終えたあとのコトだった。

私は、ぼんやりと考え事をしながら電車を下りて、とぼとぼと駅の階段を下りた。このままいつもの道をたどれば家に着いてしまう。かわりばえない毎日、いつもと同じ夕暮れ…。

(こんなのはもうイヤだ！)

このまま家に帰らなければ何かが変わるかもしれない。このままどこかに行ってしまう。

頭のなかでは、そんなことをしても無駄だとわかっていたけど。こころのなかは嵐のように荒れていて、收拾がつかなくなっていた。すぎるような気持ちで、私は一歩別の道に足を踏み出した。

しばらく歩くと、古い店が立ち並ぶ通りに出た。自分でも今の沈んだ気分をいつまでも引きずってちゃいけないと思ったから、気分転換に、そのなかの一件に入ることにした。

「いらっしやい」

入り口の近くにカウンタ-があり、そこに座っているおじいさんがアイソのいい声で迎えた。店内は以外に狭く、高そうでおしゃれな小物がところせましと棚に並んでいた。他にお客さんはいない。

私は珍しい商品の数々に、すこしだけ気分が浮上し、店内をゆっくり見てまわることにした。ガラス細工の人形、陶器の置物、古い時計…。ちょうど一つの棚を見終わった時だ。

「なにかお探しの品でも？」

ゆったりとした口調で、カウンターのおじいさんが訊いてきた。

「えっと……」

私は言葉につまって、視線を泳がせた。その時気がついたのは、置いてある商品には値札がついていなかったということ。もしかしたらそれらは、私には手が出せないほど高価なものなのかもしれない。

(どつしどつ)

急に、自分が場違いなところにいるような気がしてきて、冷や汗が浮かんだ。

「よかつたら、奥でお茶でも飲んでいかないかい？」

その言葉にびっくりしておじいさんを見ると、その顔は穏やかに笑っていた。

「えっ、あの」

戸惑う私にはかまわず、おじいさんはよっこらせ、とカウンターから立ち上がった。

「ずっとここに座ってるのも暇なものでね」

そして、私の前を通り過ぎると店の奥へと向かった。見ると、奥には繊細な模様がほどこされた扉が一つあった。おじいさんはその扉を開けてなかへ入る。扉は開けたまま。

私は、すこし迷ってからその扉をくぐった。

扉の向こうの部屋は、壁という壁が本でうめつくされていた。きつところは書齋か何かなんだろう。真ん中には古びた丸いテーブルと、ホテルにあるような大きな椅子と、お客用らしい木の椅子があった。部屋のなかにおじいさんの姿はなく、本棚にさえぎられた隣部屋から「座っててくれるかね？」と声がした。私は言われるまま木の椅子に座った。

しばらくすると、隣部屋から紅茶とお菓子ののったお盆を持ったおじいさんがゆったりとした足取りで出てきた。

「すまないねえ、汚い部屋で」

言いながら、机の上にお盆を置く。確かに片付いてるふうには見えなかった。

「紅茶でよかったかい？」

私は小さな声でハイ、と答えた。おじいさんも向かいの席に座って、ふうと息をつき、紅茶をすすった。気がついたら、私もノドが渴いてた。せつかくだから出してもらった紅茶をいただくこうと思つた。それは香り高くて、あたたかで、なんだかほつとした。

「さて、お嬢さん。名前はなんというのかね」

紅茶から目をはなし、おじいさんを見ると、さっきのような穏やかな笑顔ではなくて、すこし真面目な顔をしていた。私は緊張するできれば、知らない人に名前を教えたくはなかったけど、これは答えなければいけないな、と思つた。

「羽鳥風香はとりふうかです」

「どう書くの？」

訊かれて、とっさに持っていたカバンからノートを出して見せた。

「羽鳥風香。これはまた綺麗な名前だ」

おじいさんは感心するように言つた。私は思つた。

キレイなのは名前だけ。現実の私はちつともキレイじゃない。

「じゃあ、その名前にちなんで風の話でもしようか」

私はうつむいていた顔を上げ、いぶかしげにおじいさんを見た。

「風の話？」

おじいさんはにっとしわをよせて笑う。

「うちの品物は、お嬢さんには高すぎるからね」

自分の顔が赤くなるのを感じた。

「よけいなお世話かもしれないが」

おじいさんは私を呼ぶのに「風香ちゃんでもいいかね？」とことわりを入れた。

「元気がないように見えたから。なにか悩みごと？」

どう答えたらイイかしばらく迷つた。何を悩んでいるのかよくわからなかったから…。

「悩んだときは海に行くといい。あそこは風が強いから。風はこころを癒してくれるよ」

おじいさんは、何か知っているような顔で目を伏せて語りながら、また一口紅茶をすすった。

「なんで風が心をいやすんですか？」

「ふむ」

と、おじいさんは白いちよびヒゲをひくりと動かした。

「まずは、行ってみることだね」

そう言った顔は苦笑していた。私もまゆをしかめる。どういこうと？

「何もかも、肝心なのは自分で確かめることだよ」

そのあと、おじいさんは私にクッキーを勧め、自分も二つ三つはおぼり、私が店を出るまで、もうその風の話にはふれなかった。

妖精たちの会話

ヘズとターヤは、部屋の片隅からおじいさんと少女のやり取りを見守っていました。

「今日のテツロウさん、なんかいつもと違うネ」

ターヤが言いました。

「あんな年齢としの子、ここには来たコトないだろ？ だからじゃないかな」

ヘズは本棚の上に寝転がって頬杖をつきながら言いました。

「変わった子だったね」

ターヤは先ほどのやりとりを思い出してくすぐすと笑いました。

「まあね。おじいさんが心配するのもわかる気がするよ」

ヘズはため息をついて肩をすくめてみせます。

「人間にもいろいろあるんだらうね」

「そりゃ、オレたちみたいに気楽にはいかないだろ？」

二人はさっきの少女が店を出た後どうしたのか、気になっていました。

「海はここから遠いよね」

「うん。明日行くんじゃないかな？人間たちの休みの日だから」

ヘズはすこし考えながら答えました。

「ヘズ」

眠そうなヘズをターヤは起こすようにすこし大きな声を出しました。

「あの子、またここに来るかな？」

ヘズは腕に顔をうめながらターヤを見ました。

「あの子次第なんじゃない？」

その答えに、ターヤはおじいさんを見て、天井の上に広がっているだろう空を見上げました。

「また会えるといいな」

静かにそうつぶやいて、ターヤも眠ることになりました。

海

視界の端に、明るくなつていく部屋が見えた。目をこすって意識を覚醒させようとす。なんだか昨日はよく眠れなかったような……。そう、変なおじいさんに出会って、風の話をして、海に行くことになったんだ。

私はまだ寝ぼけてぼんやりとしながら、昨日の自分を思い返した。海に行く経路をネットで調べて、持っていくものをカバンに入れて、ケータイの目覚ましを設定した。

そこまで思い出すと、私はハッキリ目が覚めた。

「起きなくちゃ」

鳴り始めたケータイのアラーム音を止めて、布団から起き上がった。朝ごはんを食べるために階下の台所へ向かう。一階にはだれもいなかった。父も母ももう出かけた後だったみたいだ。二つ下の弟はまだ寝てるんだろう。今日は部活が休みのはずだから。

朝食の食パンを食べている間、昨日のことをずっと考えてた。

(あれって夢じゃなかったのかなあ)

駅から家までの道にあつた古いお店。初めて会つたのに、そのお店の奥の部屋で紅茶をごちそうしてくれた親切なおじいさん。

いろんなことが、私の勘違いだったような気がして仕方なかった。昨日は疲れてたし、ぼんやりしてた。本当に海に行くように言われた？ 風の話はされたけど……。

なにかおかしいな、これでいいのかな、そんな不安がくりかえし胸に浮んだ。でも、見えない何かに背中を押されるように、テキパキと仕度をはじめた。ただ単に、今日は家にいたくなかったからっていうのもあるかも。

忘れ物がないか確認して、朝のまぶしい日差しのなかへと、一歩足を踏み出した。

一度だけ、友達と近くの海に行ったことがある。その時のことを思い出しながら、二回くらい電車を乗り換えて、一時間ほど景色が変わっていく車窓を眺めていた。ようやく、目的の駅に着いたことを知らせる車内アナウンスを聞いて、切符を取り出した。

駅から下りると、カバンの中の地図を取り出す。海に行くにはそこからまたしばらく歩かなければならない。強い日差しに、もってきた帽子をかぶる。日焼け止めは家でぬってきた。のんびりした海の町を地図で確認しながら歩き始めた。

日差しはキツイのに冷たい風が吹いて、思ったほど暑くなかった。

「あ……！」

一本道の先に海を見つけた。と思った瞬間、強い風が吹いて帽子が飛ばされそうになった。短かいスカートもはためく。

風は海に近づくにつれ強くなった。というより、大きくなってカソジ。それが潮風だと気づいたのは、さびれた砂浜についた後のことだった。

（こういうコトか）

おじいさんの話が脳裏によみがえった。海は、たしかに風の領域なのかもしれない。広大な海と空が、視界を真っ青に染めていた。

砂浜にいる人はまばら。時間がまだ早いせいかもしれない。砂浜の人たちはそれぞれ、ぼんやりと海を眺めたり、マラソンしてたり、子供が遊んでたりしてた。

言われるままここまで来た自分はなにをしたらいいんだか……。ちよつと考えてから、海沿いの堤防を気の向くままに歩いて行くことにした。

歩いている間も、風が吹き寄せる。まるで波みたい。私のころのなかのわだかまりをさらっていつてくれる。

（背中に翼が生えてたら、この空を飛べるのになあ）

急に切なくなってしまうって、だれも見えていないのを確かめてから、上を向いて目を閉じた。

風が聴こえた。

(つらかったこと全部、忘れてしまいそう…)

じっさいには、忘れることも逃げることもできない。背中に翼も生えない。ただ、目の前には青い海と青い空が水平線まで続いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1074ba/>

木の葉の下で

2012年1月14日13時00分発行